

## ロマン派のピアノ音楽におけるキャラクター・ピースに関する一考察

教科・領域教育専攻

芸術系コース（音楽）

今井 妙

指導教員 森 正

### 【修了演奏曲目：ピアノ独奏】

フランツ・シューベルト作曲

Franz Peter Schubert

4つの即興曲 作品90 D. 899 より

4 Impromptus Op. 90, D. 899

第4曲 変イ長調

4. Allegretto

ローベルト・シューマン作曲

Robert Alexander Schumann

ウィーンの謝肉祭の道化 作品26

Faschingsschwank aus Wien Op. 26

第1曲 アレグロ

1. Allegro

第2曲 ロマンズ

2. Romanze

第3曲 スケルツィーノ

3. Scherzino

第4曲 インテルメッツォ

4. Intermezzo

第5曲 フィナーレ

5. Finale

はじめに

「キャラクター・ピース」とは、ロマン派を中心に発展した自由な形式を持つ小品のことである。キャラクター・ピースが発展した背景には、18世紀後半から19世紀前半の産業革命や

フランス革命等の社会の変化に市民の生活の中に音楽活動が浸透していったことや、個人の内面と深く結びついたロマン主義の考えが大きく広まったことが影響しているのではないかと、筆者は考えた。この社会の変化が、ロマン派を生きた作曲家によるピアノ作品にどのように影響しているのかを追究していく。そして、それらの考察を念頭にふまえながら、キャラクター・ピースに示されるイメージを的確に表現することが本研究の目的である。

今回は、キャラクター・ピース成立の背景となる18世紀後半から19世紀前半の時代背景について、市民と音楽の関わりやロマン主義の思想の点から追究する。そして、キャラクター・ピースの先駆けと言われるフランツ・シューベルト (Franz Peter Schubert 1797-1828) と、キャラクター・ピースを多く遺しているローベルト・シューマン (Robert Alexander Schumann 1810-1856) の作品を取り上げ考察を行うことによって、曲の理解を深め、表現の一助とする。

研究の概要

第1章では、ロマン派時代の起こりと言われる18世紀後半から19世紀前半の時代背景について、市民と音楽の関わりとロマン主義の思想の点から追究した。この期間は社会の思想や生活環境が大きく変化したと同時に、作曲家や聴衆の音楽に対する関わりが大きく変わった時代

でもあった。演奏活動の広がりによって作曲家たちの音楽の幅は広がり、貴族のものであった音楽がサロンや夜会等の集まりで市民に広まったことで、音楽はより人々の生活に身近なものとなった。また、産業化された生活に反感を覚えた芸術家たちはロマン主義の思想を立ち上げた。音楽においてもロマン主義思想の与えた影響は大きく、今までにない多くの手法を作り出し「感情の強烈さ」や「自然に対する愛」を表現したことが明らかになった。

第2章では、キャラクター・ピースの変遷について述べたうえで、キャラクター・ピースの発展についてシューベルトとシューマンの作品を中心に考察を行った。19世紀以前の音楽にも叙情的な性格をもつ器楽音楽は存在したが、ロマン主義の文芸運動が盛んになるにつれ器楽作品はより叙情的な性格を持ち、「キャラクター・ピース」というジャンルが確立された。シューベルトはその草分け的存在であり、サロンやシューベルトティアードといった親しい友人との素朴な集まりの中で発展していったことがわかった。このような狭い空間で作られた彼の作品はヴィルトゥオーゾ的な華々しさは少ないものの素朴で親しみやすく、転調を得意とする彼ならではの絶妙な表情の変化が魅力であると考えられる。ロマン主義の考えが深く浸透してきた19世紀前半において、シューマンは多くのキャラクター・ピースを作曲した。シューベルトの時代のキャラクター・ピースと比べるとより自由な表現が増え、規模が大きい曲が多い。文学作品や人間感情とのつながりによって叙情性を増した彼のキャラクター・ピースには、和声やリズム等の様々な要素を用いながらより多彩な表情が盛り込まれていることを、いくつかの作品を取り上げて示した。このように、キャラクター・

ピースのジャンルの中でも時代の流れや作曲家を取り巻く環境によって、表現した内容や表現方法が違うことを言及した。

第3章では、シューベルトとシューマンの作曲したキャラクター・ピースの中から、《4つの即興曲作品90》より第4曲、そして《ウィーンの謝肉祭の道化》作品26を取り上げ、分析を行った。

おわりに

キャラクター・ピースは自由な形式であるが故に表現の幅も広く、作曲家によっても作風が大きく変化する。シューベルトにおいては、重なり合う調性の移り変わりや今までにない複雑な和声進行によって、即興的な動きの中にも深い叙情性が存在することが明らかになった。シューマンにおいては、謝肉祭の情景というテーマの中にも喜怒哀楽の様々な表情が見られ、彼独特の作曲法により曲の中に散りばめられていることが確認できた。

演奏に関しては、微妙な表情の変化をタッチで表現する難しさを実感した。シューベルトの流れるような和声の移り変わり、そして、シューマンの瞬間にして変わる表情の表現はキャラクター・ピースならではの難しさであると考えられる。人間感情や物語的な描写とより深く結びついたキャラクター・ピースを演奏する際には、演奏者自身がその曲に対するイメージを明確に持ち、自身の音をよく聴きながら色彩豊かな演奏表現を追求することが大切であると感じた。

今回は代表的な2人の作曲家に焦点を当てて研究を行ったが、更に別の作曲家のキャラクター・ピースにおいても研究を深め、演奏表現に反映させていきたい。